

はじめに

平成8年3月、私は小・中・高等学校と県教育委員会、合わせて50年間の理科教師としての生活を終えました。定年退職後の勤務も終了する、これを「完職」というのだそうです。

でも、ちょっと気がかりなことがありました。それは、「完職」の少し前からよく聞かれるようになった「子どもたちの理科ばなれ」という言葉でした。私は「こんなに面白いのに。どうして？」と思います。もちろん、そんな子どもたちばかりではありません。

理科の時間を心待ちにし、「これは、どうしてなんだろう」と、その事象を見つめ、疑問を解決しようと努力する子どもがいます。どうやら、ちょっとしたことで嫌いになったり、「そんなことが？」と思われるようなことで大好きになったりするようなのです。

周りを見渡すと、理科が好きになれそうな施設が目につきます。それだけではありません。山が、川が、自然そのものが「ちょっと好きになってみたら」と語りかけてくれるように思います。

そんなところを紹介したいと奈良県教育振興会の会誌「やまと」に連載してきたのが「奈良サイエンススポット」です。各編は子どもたちへの手紙になっています。途中からは、私と同年代のおじいさん、おばあさんにも登場してもらいました。

お読みいただいた方からは、「奈良サイエンススポットの登場人物になったつもりで出かけてきました」とか「2人の孫に見せましたら『今度の休みに連れて行って』とせがむので行ってきました。私自身とっても勉強になりました」「何もないと思っていた奈良県、他の県の人たちにも自慢できるようなところがあるのですね。今度はどこで

しょうか。楽しみにしています」などというお話を頂きました。

こんな話に元気づけられ、これからも県内のあちこちを訪ね、手紙を出し続けるつもりですが、33編になったことを1つの節目として、小冊子にまとめてみました。ここでは、「理科のワンポイント」という項を設け、連載中には書き切れなかったこと、手紙の内容に関連することがらを書き足しています。

33通の手紙の受取人はあなたである、あなたのお子様、お孫様であるとらえていただき、ともに、理科の旅に出かけてください。そこに新しい発見があり、考えさせられる何かがあると思います。

ところで、この書のタイトル「奈良を理科する 奈良で理科する」はいかがでしょうか。「変な言葉を創って」と思われるだろうと思いますので少し説明しておきます。

私たちは、見る、聴く、触れるなどによって得た情報から、自分はどうしたらよいかを考えて行動します。これが私たちの生活です。

同様に、見る、聴く、触れるなどによって得た情報から、課題を見だし、条件を整えて実験し、得られたデータをまとめ、思考し、グラフ化したり、数式化したりして、なんらかの結論を得、さらに法則化する。これが「科学する」ということです。

この書のタイトルの中の「理科する」は、「科学する」ことの流れの前半に重点を置いた行動を意味しています。「変な言葉を創って」などとおっしゃらずに、この書をお読みいただく間、この「理科する」という言葉を認めてください。